二〇二四年度　学校推薦型選抜

芸術文化学部日本文学科　小論文

注意事項

一、試験開始の合図があるまで、問題用紙を開いてはいけません。

二、試験中に使用できるものは、筆記用具、消しゴム、鉛筆削り、時計（計時機能のみのもの）に限ります。

三、試験開始後すぐに、配布された用紙の枚数（問題用紙は表紙を別にして五頁、解答用紙は三枚）を確認してください。

四、試験開始後、すべての解答用紙に受験番号を記入してください。

五、試験時間は、九〇分です。

六、提出は、解答用紙のみです。

次の課題文１は「日本語の文体とその使い分け」について、課題文２は「言語態の差異」について述べたものである。二つの課題文を読んで、後の問に答えなさい。

【課題文１】

幕末から明治にかけて日本の知識階級はまことに多彩な、ぜいたくな言語生活をしていた。彼らは何種類もの文体を、場合により必要に応じてみごとに使いわける。手紙ひとつ書くにも、たとえば相手が女なら、

一ふでまゐらせ候　寒さつよく候へどもいよ〳〵おん障なくおん暮めでたくぞんじまゐらせ候……

（久坂玄瑞より妻へ）

男どうしなら、

玄瑞君も益慷慨過浪華至京師愉快々々、京師之事実可悦可懼実に天下之安危於是決矣……

（髙杉東行より久坂玄瑞へ）

おなじ国語とは思えないほど異質の文体だが、彼らはかくべつの努力なしに両極端を使いこなす。しかも、こまやかさとか勢いのよさとか、それぞれの性能をよく生かしているのだ。手紙ばかりではない。感興の発するままに彼らはときに和歌を、漢詩を、俳句をつくり、ときに今様、都々逸をひねる。べつに文学マニアではない多忙な武士や町人が、千数百年にわたる多元的な文学伝統の遺産をほとんどすべて身近なものと感じ、即座にそれを活用するという事態は、世界の歴史にもめずらしいだろう。

文体や詩形の豪華な衣裳箱のなかから、そのときどきの感興の色あいに応じて彼らはいちばんいい柄をえらぶ。もちろん、ひとつの文体だけでは言いつくせない微妙な心境もあろう。そんなとき彼らは、ちがう柄で二枚三枚と、器用にかさね着をする。

詩酒放蕩。友人責以大義。因賦此詩答之。

堪笑書生抱杞憂　乾坤自古事悠々

狂人別有胸間快　無日無登売酒楼

きれてくれろとやはらかに真綿で首のこわいけん
八千八声のほとゝきす血を吐くよりも猶つらい
三千世界の鴉をころし
ぬしと朝寝がしてみたい

（髙杉東行）

彼らのこうした器用さの源泉として、大ざっぱにふたつの事情がかんがえられる。まず、和漢の古典に関するかぎり、彼らが現代の知識階級よりずっとたしかな素養をもっていたこと。そして、彼らが使いわける文体や詩形が、いずれも高度のマナリズム（注１）に固まっていたこと。

さまざまな観念、イメージ、情緒、語法、リズム、主題などが、彼らの教養のひきだしのなかではすべて整然と分類してある。天下国家の問題はおおむね漢文脈のなわばり。恋愛や情事はもちろん和文脈だが、まじめな恋愛なら短歌、粋人の浮気ていどなら都々逸をそれぞれ本籍地とする。だから、たとえば三十一文字で特定の風物を歌おうとすれば、その季節、背景、気分などはほぼ自動的にきまってくるし、語句やイメージにも便利な既成品がたくさんある。あとは多少の変奏と順列組合せの作業だけ。ひとかけらの文才がもしもそれに参加すれば、かなり詩らしい詩ができあがるだろう。

こうした高度のマナリズムは、多くの人間がらくに詩をつくるための必要条件であり、その必然的な結果でもある。科挙時代の中国、十六世紀末のヨーロッパなどにもおなじような状況があったし、だからこそ絶句、律詩もソネットもひろく知識階級の日常生活にとけこむことができた。しかし、すくなくともソネットの場合、マナリズムはあまり長生きしない。アモーレ、永遠の女性といったソネット本来の主題やイメージは、むしろ『ヴェルテル』『狭き門』など散文作品のなかに忠実な後継者をみいだし、十四行の厳格な詩形はどんな種類の観念や感情にもふさわしい無色透明な容器への道をたどる。

王朝時代から幕末までの文学伝統のなかでは、ほとんどの文体や詩形がそれと正反対に、分業の強化による洗練をかさねた。『万葉集』にみられる壮大なイメージ、はげしい語調などは次第に短歌の世界からすがたを消し、かえり点つきの漢詩漢文のなかに安住の地をみいだす。逆に漢文脈のほうでは、ますますたおやかになってゆく歌ことばや、くだけた話しことばの長所をぬすむことはほどほどにして、もっぱら爽快な禅味、老荘ふうの達観、慷慨（注２）調などにみがきをかける。幕末のころには、こうした分業がすでに極度に細分化し安定しているから、どんな場所でどんな感慨におそわれても、ひとびとは表現形式の選択にまよう必要がなかった。

文久三年の春、家茂上洛という政局の大転換をむかえて長州の志士たちがぞくぞく京

都にあつまっていたとき、品川あたりの茶屋で酒びたりになっている高杉には、たぶん微妙な感想があった。青二才どもあわてるな、おれにはもっと遠大な計画があるという気負いと、たしかにおれは遊冶郎（注３）だよ、不粋な忠告はやめてくれないかという皮肉な笑い。彼の絶句も俗謡も、たしかにこの両面を表現している。たとえば都々逸では、これた七五調の和文脈に「三千世界の」という八音の漢語を侵入させることによって、粋人の酔語のなかにささやかな壮士調をひびかせている。（これを侵入とよぶのはやや大げさだろうか。七五調のどこかに四四の八音をしのびこませるのは俗謡の常套手段なのだし、仏教系統のわかりやすい漢語は、漢文脈よりもむしろ和文脈のほうに編入されたのだから。）しかし高杉が俗謡のなかでは、壮士であるよりもはるかに本格的に粋人であり、漢詩では壮士が表面にでるという事情にかわりはない。この比重関係が逆になることは、おそらくありえないだろう。

ひとつの表現形式を利用するためには、ひとはまず自分の声域を極端にしぼって、ときには裏声だけで歌わねばならない。必要に応じて高杉は東行になったり晋作になったり、春風、梅之助、潜蔵とめまぐるしくマスクをとりかえるけれども、同時に全部それをかぶることはもちろん不可能なのだ。仮面はいっさい使いたくない、いつも自然本体の自分でありたいと思うなら、彼は言語表現の世界から出ていくしかない。

というのは、散文もやはりきびしい分業制度の支配下にある。漢文脈なら哲学的な壮大な観念を音吐朗々たる名調子にのせることができるし、和文脈なら、ときには優雅そのもの、ときには平俗そのものの口調で、しっとりと語ることができる。しかし、もしその両側にまたがる性能がほしくなったら――同時に論理的で平俗で名調子である必要にせまられたら、彼は（そしてぼくたちは）ひどく困る。

（永川玲二『ことばの政治学』による）

【課題文２】

情報の言語化は「話しことば」から始まる。文字によってことばを記したものが「書きことば」だから、文字がなければ「書きことば」は始まらず、成立もしない。

日本列島上で集団生活が営まれた時点で、言語はあったと推測するのが自然であろう。集団生活をする以上、集団を構成する人々の間で、意思疎通を図る必要がある。身振り手振りのみであらゆる意思疎通ができるとは思いにくい。そうであれば、縄文時代にも、弥生時代にも言語はあったことになる。その言語が具体的にどのような言語であったかはわ

からない。しかし、現在使っている日本語につながる言語＝「原日本語」であったと推測することは、許されるだろう。その「原日本語」は「話しことば」としての日本語ということになる。

「話しことば」と「書きことば」とのもっとも違う点は、自然に修得できるか、できないかといってよいだろう。よく、言語は自然習得できる、というが、そういう場合の「言語」は「話しことば」のことだ。どんな言語にも「話しことば」と「書きことば」とがあるから、日本語使用者もそのことはわかっていると思うが、違いを意識する機会は案外少ないかもしれない。

筆者は明治の日本語を観察するために、かなりの数の、明治時代に書かれたはがきを所持しているが、その中に「謹賀新年／併祈高堂之万福」と印刷されている明治三十六（一九〇三）年一月一日の日付のある年賀状がある。「併祈高堂之万福」は「併せて高堂の万福を祈る」を書いたものであろう。「高堂」は〈立派な家屋・立派な人の住む家〉のことであるが、そこから、そうした家に住む人を敬っていう語としても使われるようになった。「併祈貴家之万福」という表現もあり、定型表現といってよい。

この年賀状の表には、大津郵便電信局の「請取人左ノ所へ移転候ニ付持戻リ候也」という紙が貼られているので、もしかするとこの年賀状はうまく届かなかったかもしれない。それはともかくとして、年賀状のことばはいわゆる「漢文」で、貼られている紙に書かれているのは、いわゆる「候文」である。現在は「あて所に尋ねあたりません」「あて名不完全で配達できません」といった文が貼付される。

「請取人」が「移転」しているから「持戻」った、と説明するのと「尋ねあたりません」と説明するのとでは、文の構造、そのもととなる発想、いずれにもかなりの違いがある。「言語表現のもととなる発想」「発想に基づいた言語表現の構造」はいずれも重要であるが、今ここではそれは話題にしないことにする。

ここでは、明治三十六年にはこういうところにも「候文」が使われていたことに注目したい。つまり、これが当時の「書きことば」の一つであった。しかし、「書きことば」として「候文」を使っているからといって、「候文」で話していたわけではない。明治三十六年二月には小杉天外の「魔風恋風」という小説が『読売新聞』に発表されている。

「あの、女子学院の生徒で、大変に英語の優る女ですッて。ですからね、昨日なんかも、皇后陛下の御前に出てね、何か英語のお話を御覧に入れる予定でしたッて……。」

「爾う、其様なに優るの？　だッて、未だ十五六にきや成ら無いってぢやありませんか。」

右は「若い二人の看護婦」の会話という設定であるが、現代日本語にちかい「話しことば」を使っている。別の箇所では「巡査」が「今此処を通っちゃ可かん」と言っている。いずれも「候文」ではない。このように、「書きことば」と「話しことば」とは言語のありかたそのものがかなり違っていた。「言語のありかたそのもの」を「言語態」と表現するならば、「書きことば」と「話しことば」は異なる言語態ということになる。

二つの言語態を接近させようというのが明治二十年頃から盛んになった「言文一致運動」であった。「言＝話しことば」と「文＝書きことば」を近づけようということであるが、接近は、「話すように書く」すなわち、「書きことば」を「話しことば」に近づけるという方向で模索され、明治四十年頃にはある程度の達成をみた、と考えられている。

「話しことば」と「書きことば」とは異なる言語態であるという認識は大事だ。現在においては、「文＝書きことば」が「言＝話しことば」寄りにある。そのために、二つの言語態という感覚が曖昧になりやすい。

（今野真二『うつりゆく日本語をよむ　ーことばが壊れる前に』による）

注１　マナリズム　　マンネリズム。型にはまり独創性を失う傾向のこと。

注２　慷慨（こうがい）　世の中のことや自己の運命を、憤り嘆くこと。

注３　遊冶郎（ゆうやろう）　遊び人。放蕩者のこと。

問一　二つの課題文を踏まえ、「日本語表現の多様な姿と、その意味と機能」というテーマであなたが考えたことについて、具体例を挙げて論じなさい。（六〇〇字以内）

問二　二つの課題文を参考にした場合、どのような研究あるいは創作が可能であると考えますか。現在、あなたが尾道市立大学日本文学科で学びたいと考えている内容と関連づけて具体的に述べなさい。（四〇〇字以内）

二〇二四年度　学校推薦型選抜

芸術文化学部日本文学科　小論文　解答用紙（一）

縦書きで記入すること

問一

400字

受験番号

二〇二四年度　学校推薦型選抜

芸術文化学部日本文学科　小論文　解答用紙（二）

縦書きで記入すること

問一の続き

600字

受験番号

二〇二四年度　学校推薦型選抜
芸術文化学部日本文学科　小論文　解答用紙（三）

縦書きで記入すること

問二

400字

受験番号

2024 日本文学科 学校推薦型小論文（ 解答時間　90 分 ）

（ 出典・出題のねらい・評価の観点 ）

出典　課題文 2 つ

永川玲二『ことばの政治学』(同時代ライブラリー)　　432 頁 ～ 436 頁　　岩波書店　　2017 年 10 月

今野真二『うつりゆく日本語をよむーことばが壊れる前に』　　6 頁 ～ 10 頁　　岩波書店　　2021 年 12 月

問 1　二つの課題文を踏まえ、「日本語表現の多様な姿と、その意味と機能」というテーマであなたが考えたことについて、具体例を挙げて論じなさい。（ 600 字以内）

問 2　二つの課題文を参考にした場合、どのような研究あるいは創作が可能であると考えますか。現在、あなたが尾道市立大学日本文学科で学びたいと考えている内容と関連づけて具体的に述べなさい。（ 400 字以内）

出題のねらい

・説明的文章の基礎的な読解力をみる。

・日本文学を学ぶにあたって基本となることばの多様性への関心や論理的思考力、文章表現力をみる。具体的には日本語の文体と使い分け、言語態の差異に関する課題文を読み、内容を踏まえた上で、自分自身の知識や経験に関連づけて日本の文学および文化についての論を展開することができるかを問う。

・課題文に関連づけた研究あるいは創作の可能性をわかりやすく説明できるかを問うと同時に、本学での学びに向けての意欲を測定する。

評価の観点　（ 50 点満点 ）

1. 設問を正しく理解した上で、文章から正確に情報を読み取っているか。
2. 設問を正しく理解した上で、適切な（論の展開に必要な）具体例が挙げられているか。
3. 課題文や具体例、自分自身の知識や経験を活用した上で、論理的な文章が構成されているか。
4. 文章の構成を工夫した上で、読み手にわかりやすい説明をしているか。
5. 設問を正しく理解した上で、本学での学びのイメージと具体的に結びつけて説明しているか。